

前412－411年のスパルターペルシア同盟の進展

—アモルゲス反乱鎮圧から対アテナイ連合へ—⁽¹⁾

堀 井 健 一

The Development of Alliance between Spartans and Persians in 412-411 B.C.: From the Suppression of Amorges' Rebellion to their Combination against the Athenians

Ken-ichi HORII

はじめに

古代ギリシア人世界では前431－404年にアテナイとスパルタの間でペロポネソス戦争が起こった。アテナイの国制に着目するならば、この戦争中の前411年にいわゆる四百人寡頭政が出現したし、また戦後まもなくの時期にはいわゆる三十人僭主の暴政とそれを打倒する内戦および民主政の復興という大事件が続いた。そのうちの前411年の四百人寡頭政は、わずか4カ月ほどの短命な政権であったとは言え、前6世紀末のクレステネスの改革によってアテナイが民主政を始めて後、最終的には前322/321年に民主政を廃止するまでのアテナイ民主政の歴史において、アテナイ人たちが初めて経験する自国の民主政の危機であった。前411年頃のアテナイ人たちは、自国の民主政を「父祖伝来の諸法」に基づくもの (Thucydides, *History* [以下、Thuc. と略す] 8.76.6) と認識していたことが知られており、彼らにとってはその年の政変は未曾有の経験であり大きな国難であった。

前411年のアテナイ政変までに至る直前の状況は、ペロポネソス戦争が開始されて約20年を経っていたが、前415－413年のシチリア遠征の失敗によってアテナイが艦隊を失い、アテナイ人たちが次にはスパルタの艦隊がアテナイを攻めに来るという恐怖に怯えているという有り様であった。そのような状況の中で、アテナイの敵国スパルタは、かつてのペルシア戦争期にはギリシア民族の奴隷化を目論む敵国であったペルシアと初めて軍事同盟を結んだ。すなわち、ペルシア側のティッサフェルネスとファルナバズスが、スパルタに提携を申し出て、スパルタがそれに応じてペルシアと3度にわたって軍事同盟を結んだ。この同盟についてはトゥキュディデスによる言及があり、それによると同盟締結の年代は、第1回が前412年夏 (Thuc., 8.17.4-18)、第2回が前412年冬 (Thuc., 8.36.2-37)、第3回が前411年春 (Thuc., 8.57.1-58) である⁽²⁾。このスパルターペルシア同盟についてはさらに、同盟締結の約80年の後に執筆されたアリストテレス『アテナイ人の国制』(Aristoteles, *Athenaion Politeia*) 29章1節の中で「戦争の局面に優劣のなかった間は人々は民主政治を存続させていった。しかるにシケリアに起こった不幸の後にペルシア王との同盟によってラケダイモン人側が有力となるや、彼らは民主政治を変革して四百人の国制を樹立せざるを得なかった」(村川堅太郎訳)⁽³⁾と言及されている。このことから、その後数十年間の長きにわたってアテナイ人の間で、問題のスパルターペルシア軍事同盟が前411年初夏から始まったアテナイの寡頭派政変に大きな影響を与えたことが語り継がれていたと考えてよい。

本稿では、この3回にわたるスパルターペルシア同盟について主としてペルシア側の意図を考察してみる。この同盟についてペルシア側の意図を考察する必要があるのは、次の理由からである。第一に、かつてのペルシア戦争期のダレイオス1世とクセルクセス1世の時代にはペルシアはギリシア人世界を支配せんと欲していたのであるが、前412年にはなにゆえギリシア人のスパルタと軍事同盟を結ぶ必要に迫られたかを明らかにする必要がある。第二に、後述するが、問題のスパルターペルシア軍事同盟は、3度にわたって条約が結ばれたが、これまでの研究者たちはこれら3回の軍事同盟条約を一まとめに扱って対アテナイ軍事同盟と単純化して解釈する傾向にあったが、はたしてそのような解釈が適当であるかどうかを見極める必要があるのではなかろうか。

Thuc., 8.29.1の記述によれば、ティッサフェルネスがミレトスでペロポネソス軍兵士に1カ月分の給与を支払った後、今後の分はペルシア大王の指示があるまで半額に減額した金額を支給したいと語った。これは、第1回の条約後の事であるので、この段階ではスパルターペルシア同盟が、ペルシア側はティッサフェルネス単独の意向で締結された可能性があることを示唆してくれる。ケイガンは、第1回条約から単純にスパルタ人とペルシア大王との軍事同盟であると述べ⁽⁴⁾、さらに、この第1回条約がペルシアの小アジア問題に対する対策でありアモルゲス反乱に対する対策であると指摘する⁽⁵⁾。他方、ゴム・アンドリュース・ドーヴァー⁽⁶⁾によれば、第3回条約は、初めの2つの条約と違って、(a) ティッサフェルネスの他に数人のペルシア人が立ち会っていること⁽⁷⁾、(b) 前文が推敲されていること、(c) ペルシアとスパルタの両方の表記で日付がなされていること、の3点から正式に承認されるべき文書であったと考えられる⁽⁸⁾。また、ゴムらは、第3回条約の締結の際にスパルタ本国の認可を得る時間的余裕があったこと⁽⁹⁾、そして (a) 兵士の日当の額、(b) 大王の船団、(c) 大王の帝国領域の定義、の3点で大王が関わっていたことを推測している⁽¹⁰⁾。他方、ゴムら⁽¹¹⁾は、第1回条約と第2回条約のいずれも正式にはスパルタ人によって誓われていなかったことを Thuc., 8.43.4が示すことを指摘しているし、ルイス⁽¹²⁾は、第1回条約が単純な内容で、双方とも同盟締結の軍事領域として小アジア以上のことを考えていないことを指摘している。従って、これまでの研究者たちのスパルターペルシア同盟についての言及や評論を元にしてその全体の構図を推察すると、問題の同盟は、初めは地域的問題を取り扱った協定であったものが次第に正式の軍事同盟になったと解釈できる可能性が浮かび上がってくる。これまでの研究では主としてスパルタ側の見地から、問題の3回にわたる条約がまとめて軍事同盟として処理されがちであったが、ここで改めて第1回条約の締結理由が問題となる。はたして第1回条約は、対アテナイ戦争遂行のために結ばれた、スパルタとペルシアの間の軍事同盟であったのか、あるいは他の問題を処理する軍事同盟であったのか。以下では、第1回条約締結理由の他の可能性としてのアモルゲス反乱を視野に入れながら問題の同盟の進展状況を詳しく考察する。

第1章 3つの条約の関係

まず初めに、3つの条約の間の関係についてみてみる。第1回条約は、スパルタ側のカルキデウスとペルシア側のティッサフェルネスの間で結ばれた。その要旨は、(a) ペルシア領内からアテナイへの貢納金流出を防ぐ、(b) アテナイを共同の敵とする、(c) ペルシア、スパルタおよびその同盟諸都市から離反したものは共同の敵とする、である (Thuc., 8.18)。

ケイガン⁽¹⁾が指摘しているように、この条約のなかにはペルシア側からのスパルタ支援策は、財政上であれその他の手段であれ、具体的に明記されていない。また、この第1回条約が正式のものとは考えられず、単純な内容であり、地域的問題に限定された可能性があるという論者の指摘は上記で述べた。加えて、ゴムラ⁽¹⁴⁾は、第1回条約がティッサフェルネスのニーズ (Thuc., 8.5.5) に配慮されていることを指摘している。彼のニーズとは、小アジアのギリシア諸都市からの貢納金未納分を取り立てるうえでアテナイを弱体化させることと、アモルゲス反乱の鎮圧である。

第2回条約は、スパルタ側のテリメネスとペルシア側のティッサフェルネスの間で結ばれた。その要旨は、(a) 両者の領土の相互不干渉、(b) 両者間の了解による相互の要求の実現、(c) アテナイとその同盟諸都市を共同の敵とすること、(d) 両者の領土の相互安全保障、である。トゥキュディデスはこの条約を表現する際、前回の条約の際には *ksymmakhia* (同盟関係) という語 (Thuc., 8.18.1) を使用しているのに対して、*philia* (友好関係) という語 (Thuc., 8.37.1) を使用している⁽¹⁵⁾。2つの条約の締結の間にはペロポネソス軍によるアモルゲス反乱鎮圧の事件 (Thuc., 8.28.2-4) がある。そこで、ケイガン⁽¹⁶⁾は、第1回の条約の (c) の条項、すなわち、ペルシア、スパルタおよびその同盟諸都市から離反したものは共同の敵とする、という文言がもはや必要とされなかったと指摘する。

第3回条約は、スパルタ側の代表者が不明であるが、ペルシア側のティッサフェルネスとの間で結ばれた。ペルシア側にはファルナバズスの兄弟が立ち会っている (Thuc., 8.58.1)⁽¹⁷⁾。その要旨は、(a) アジアの王領についての定義、(b) 相互不干渉、(c) 大王の船団の派遣、(d) スパルタ軍への日当支給、(e) 共同の戦争遂行と戦争終結後の全面講和、である。この条約に大王が関わっている可能性については上記で述べた。

この条約にティッサフェルネスの他にファルナバズスが立ち会っていることは注目に値する。なぜならば、この条約後、ティッサフェルネスからスパルタへの日当支給が不十分で途絶えがちであり (Thuc., 8.78, 80.1, 83.2-3)、大王の船団が派遣されない (Thuc., 8.78, 87.1-3) のでスパルタ軍がティッサフェルネスに見切りをつけてファルナバズスを利用しようとするに至った (Thuc., 8.99) からである。後に、スパルタ艦隊の長官ミンダロスとファルナバズスは、前410年春のキュジコス戦で共同して戦ったが、アテナイ軍に破れた (Xenophon, *Hellenica* [以下 Xen., *Hell.* と略す] 1.1.16-18; Diodoros of Sicily [以下 Diod. と略す], 13.50.1-51.8)。従って、第3回条約の締結の際、ペルシア側の交渉窓口は前の2つの条約交渉の実績のあるティッサフェルネスであったが、その後の軍事行動全般について大王は彼よりもファルナバズスに重きを置いて任せたかもしれない。また、大王の船団が来援しなかった問題について、ゴムラ⁽¹⁸⁾が指摘しているように、第3回条約のテキストの中では3度「大王の船団」と呼ばれ (Thuc., 8.58.5-7)、他方で、叙述の中で「フェニキアの船団」と呼ばれており (例えば、Thuc., 8.59)、さらに問題の船団が来援しないことがティッサフェルネスの責任であるように叙述されているが、その船団が来援しなかったのは大王の指令によるものであろう。加えて、前412年冬から翌年秋にかけてティッサフェルネスを頼っていたアルキビアデスは、前410年春頃に再び彼の許を訪れた時、大王の命令に従った彼によって捕らえられた (Xen., *Hell.* 1.1.9)。ファルナバズスがスパルタ軍に接近して (Thuc., 8.99) からは、大王の対アテナイ敵対の姿勢が明らかになっていると考えられる。さらに、ゴムラ⁽¹⁹⁾が示唆していることであるが、第3回条約以後、スパルタ支援の資金の提供者が

サトラップたちから大王へ変わった可能性がある。

従って、第1回条約のスパルターペルシア軍事同盟は地域的な問題进行处理するものにはすぎなかったが、第3回条約締結の際には前の2つの条約の実績を利用して大王側が対アテナイ対策についてスパルタと正式に同盟することを意図していたと考えられる。それゆえに、スパルターペルシア同盟は、必ずしも第1回から第3回まで首尾一貫していたと考える必要はない。

第2章 第1回条約とアモルゲス反乱

次に、アモルゲス反乱とスパルターペルシア同盟の関係、特に第1回同盟との関係について考察してみる。

第1回条約が地域的な問題に対処するものであり、ティッサフェルネスのニーズに配慮されていたことは上記で述べた。彼のニーズとは、小アジアのギリシア諸都市からの貢納金未納分を取り立てるうえでアテナイを弱体化させることと、アモルゲス反乱鎮圧である(Thuc., 8.5.5)。前サトラップのピストゥネスの庶子アモルゲスは、小アジアのカリアでアテナイの支援を得て(Andocides [以下、And. と略す], 3 *On the Peace with Sparta* 29)⁽²⁰⁾反乱を起こした⁽²¹⁾。アテナイがアモルゲス支援の決定を行なった時期は、前414年初めと考えられる⁽²²⁾。アモルゲスの傭兵部隊はほとんどがペロポネソス人であった(Thuc., 8.28.4)。アテナイのアモルゲス支援を語るAnd., 3.29は、アテナイがペルシアとの有力な友好関係を拒否して弱小勢力と同盟した失敗例として述べられているが、その史料によるとアテナイとアモルゲスの同盟がスパルタと大王との連合に至った原因とみなされている⁽²³⁾。また、アモルゲス反乱の鎮圧は、結局、ペルシア軍自体によるものでなく、ペロポネソス軍の力によるものであった。アモルゲスが占拠したイアソスの地にいた者たちがアテナイ船団と勘違いしてペロポネソス船団を引き入れて敗北し、アモルゲスが捕らわれてティッサフェルネスに引き渡されたのである(Thuc., 8.28.2-3)。そのペロポネソス船団によるイアソス襲撃はティッサフェルネスの説得によるものであった(Thuc., 8.28.2)。これによって当時のティッサフェルネスのニーズ(Thuc., 8.5.5)の一部が満たされた。

アモルゲス反乱の事件は、これまであまり研究者が注目してこなかった対象である。その理由は、それについて言及する史料が僅少であることに加え、この事件についてトゥキュディデスがあまり語っていないからである。アンドリュース⁽²⁴⁾は、彼がこの事件についてあまり語らないことを指摘し、その理由としてアテナイ人たちがこの件について語られなくてもよく知っていることを挙げている。スパルターペルシア同盟の締結の問題を考察する際、この点に留意する必要があると思われる。

また、アモルゲス反乱の鎮圧後に結ばれた第2回条約では大王領とスパルタ領の相互安全保障が規定されている(Thuc., 8.37.5)。ティッサフェルネス側にとってこの規定は、反乱鎮圧後のカリア地方に彼の支配権を周到に及ぼすのに好都合である。さらに、ティッサフェルネスが当面の課題であったアモルゲス反乱鎮圧を成し遂げ、その結果、ギリシア人への対応に余裕が持てるようになったことを示すものとして、彼の許にアルキビアデスが身を置いたこと(Thuc., 8.45.1-46.5, 50.3-4, 52, 56.2-3, 81.2-82.3)がある。この時期にティッサフェルネスは、アテナイ軍とスパルタ軍の双方の勢力を弱めるためにアテナイに接近する策略についての彼の話に耳を傾けさせた(Thuc., 8.52)。だが、ティッサフェル

ネスは、結局、アテナイへの接近策を退け、スパルタと第3回条約を締結したし、後に当のアルキビアデスを捕らえることになる (Xen., *Hell.* 1.1.9)。従って、3回にわたるスパルターペルシア同盟は、アモルゲス反乱鎮圧以前の第1回条約締結の意図やそれを取り巻く状況と、それ以後の2つの条約、とりわけ第3回条約締結の意図やそれを取り巻く状況の間にペルシア側から見て違いが見られると考えてよい。

以上のことをまとめておく。And., 3.29が示唆していることであるが、前414年初めと考えられる、アテナイのアモルゲス反乱への支援は、スパルタとペルシアを軍事のうえで結びつける原因となった。ペルシア戦争期から小アジアのギリシア諸都市から貢納金を取り立てようとしていたペルシアにとってアモルゲス反乱は痛手であった。シケリアでのアテナイ軍の敗北後、ティッサフェルネスは、この反乱を鎮圧するために積極的にスパルタと軍事同盟を結ぶ努力をしたに違いない。こうして前412年夏にスパルタとペルシアの間で第1回条約が締結されたし、この条規に従ってペロポネソス軍の勢力によってアモルゲス反乱が鎮圧された。その後、前412年冬の第2回条約を経て前411年春に第3回条約が締結されたが、その第3回条約は、大王が関与した正式のものであったに違いない。ペルシア側の交渉者はいずれの条約もティッサフェルネスであったが、それは第1回条約の締結、およびその目的としてのアモルゲス反乱鎮圧の完遂、の実績によるものであろう。ティッサフェルネスはカリアのアモルゲス反乱の鎮圧のためスパルタと軍事同盟を結んだが、反乱鎮圧後に次には大王自ら本格的にアテナイ打倒を検討したであろうし、その結果が第3回条約に表れている。ペルシア側は第3回条約において、ペロポネソス同盟諸国だけでなくペルシアも含めた全面講和をスパルタ側に約束させた。これがペルシア側にどのような利点をもたらしたかを推測してみると、ペルシア側から見れば、近い将来に自国からスパルタへの資金援助によってアテナイが降伏することになれば、ペルシアによる小アジアのギリシア人のデロス同盟諸国からの貢納金取り立てをスパルタ側に認めさせる機会を得ることになる。このように、ペロポネソス戦争期のスパルターペルシア同盟は、第1回条約がティッサフェルネスのアモルゲス反乱鎮圧の意図から生まれた地域発生的で地域限定的なものであったが、徐々に大王が関与する正式な形に移行した。ペルシア側から見れば、初めはティッサフェルネスが、次に大王がスパルタと軍事同盟を結ぶことによって自身の目的達成のためにスパルタを初めとするペロポネソス軍を利用しようと意図したと言えよう。

結論

前412-411年のスパルタとペルシアの間の3回にわたる軍事同盟は、単純に一纏まりのものとするべきではない。その軍事同盟の初めは、ペルシアのサトラップであるティッサフェルネスが、アテナイの支援を受けた、小アジアのアモルゲスによる反乱を鎮圧する意図からスパルタに接近して結ばれたものであり、ギリシア人の一国とペルシア王国のサトラップの間における地域発生的で地域限定的なものであった。だが、その軍事同盟は、最終の第3回の条約に至っては、ペルシア側の当事者が変わり、ペルシア大王自らがスパルタ軍への資金援助を企てて将来のペロポネソス戦争終了後の戦後体制における小アジアの利権を自国に有利にすることを意図した本格的なものに発展したと思われる。この軍事同盟は、ペルシア側から見れば、初めは地域紛争の解決を意図したものから最終的には国

家レベルの利益を意図したものへと展開し、その目的を成就するためにスパルタを初めとするペロポネソス軍を利用しようとしたものであると考えられる。当時のアテナイ人は、このようなスパルターペルシア軍事同盟の急速な進展を目の当たりにして、対スパルタ戦争を遂行するうえで大変な脅威を感じたに違いない。その結果、アテナイ人たちは、かつての敵国であった大国ペルシアを味方に引き入れることを画策するまでに外交方針を変更し、ペルシア側との唯一の交渉の窓口に立っていた亡命者アルキビアデスに大いに頼ることとなり、結果的に父祖伝来の民主政の廃止と四百人寡頭政の成立に道を開いてしまったと言えよう。

註

- (1) 本稿は、平成元年度科学研究費補助金総合研究 (A) 「西洋における異文化接触の史的研究」(研究代表者 向山宏) の研究成果報告書 (1990年3月) における拙稿の報告「ペロポネソス戦争期のスパルターペルシア同盟の進展—アモルゲス反乱鎮圧から対アテナイ連合へ—」(11-15頁) に加筆・修正して学術論文にしたものである。前述の報告を執筆した当時は、この種の科学研究費補助金の研究成果報告書の報告記事が学術論文として研究業績とみなされるものと愚考していたが、最近、そうではないと指摘があったのを受けて、本稿の執筆と本紀要への掲載となった。
- (2) Cf. Diod., 13.36.5; Platon, *Menexenos* 243 B.
- (3) アリストテレス『アテナイ人の国制』(村川堅太郎訳)(岩波書店、1980年) 57頁。
- (4) D. Kagan, *The Fall of the Athenian Empire* (Ithaca & London, 1987), p. 47.
- (5) *Ibid.*, p. 48. また、Kagan, *op. cit.*, p. 49は、アモルゲス反乱の鎮圧(Thuc., 8.28.2-4) が第1回条約で誓われたとおりに行なわれたと述べる。
- (6) A.W. Gomme, A. Andrewes & K.J. Dover, *A Historical Commentary on Thucydides* (以下、*H.C.T.* と略す) Vol. 5 Book VIII (Oxford, 1981), p. 143.
- (7) Cf. Kagan, *op. cit.*, p. 98.
- (8) Kagan, *op. cit.*, p. 98も、第3回条約が、その形式と前文の考察から、「両国の本国政府によって承認された正式の条約」であることを指摘する。
- (9) Gomme et al., *H.C.T.* Vol. 5, p. 143.
- (10) *Ibid.*, p. 104-105.
- (11) *Ibid.*, p. 143.
- (12) D.M. Lewis, *Sparta and Persia* (Leiden, 1977), p. 90.
- (13) Kagan, *op. cit.*, p. 48.
- (14) Gomme et al., *H.C.T.* Vol. 5, p. 40, 143.
- (15) Cf. Gomme et al., *H.C.T.* Vol. 5, p. 79-80; Kagan, *op. cit.*, p. 81.
- (16) Kagan, *op. cit.*, p. 81.
- (17) Cf. Lewis, *op. cit.*, p. 104; Gomme et al., *H.C.T.* Vol. 5, p. 139-140.
- (18) Gomme et al., *H.C.T.* Vol. 5, p. 145.
- (19) Gomme et al., *H.C.T.* Vol. 5, p. 142.
- (20) アテナイのアモルゲス支援に関連する事柄には And., 3.29の他に、アモルゲスが占拠したイアソスにいた者たちがアテナイ船団と勘違いしてペロポネソス船団を引き入れ

て敗北したためにアモルゲスが捕らえられたこと (Thuc., 8.28.2-3) と、フリュニコスがイアソスとアモルゲスを裏切ったというアルキビアデスの中傷 (Thuc., 8.54.3) がある。

- (21) Cf. G. Busolt, *Griechische Geschichte bis zur Schlacht bei Chaeroneia* (以下 *G.G.* と略す) 3.2 (Gotha, 1904; rpt. Hildesheim, 1967), p. 1354, 1417; Lewis, *op. cit.*, p. 85-86.
- (22) Busolt., *G.G.* 3.2, p. 1354 n. 2; A. Andrewes, "Thucydides and the Persians," *Historia* 10 (1961), p. 5; R. Meiggs & D. Lewis, *A Selection of Greek Historical Inscriptions to the End of the Fifth Century B.C.* (Oxford, 1969; rpt. 1989), no.77 p. 236; Lewis, *op. cit.*, p. 86 & n. 17. 女神アテナの国庫からの支出を刻んだ碑文 [D.M. Lewis ed., *Inscriptiones Graecae* (以下 *I.G.* と略す) I³ 370 l. 79 (= F.H. Gaertringen ed., *I.G.* I² [Berlin, 1924; rpt. Chicago, 1974] 302 l. 69= Meiggs & Lewis, *op. cit.*, no. 77 l. 79) に前415/4年の8期のプリュタネイアに stratēgos en Eph [- (エ [---] の地の将軍) へ金額不明の支出がなされた旨が記されている。研究者の間では、Eph [- で始まる地名は Ephesos に間違いないと解釈してこの碑文史料をアモルゲス支援のアテナイ人将軍と結びつけることで意見が一致している。従って、アテナイのアモルゲス支援の決定は、前414年3月またはその直前にあたると考えられる。
- (23) Busolt, *G.G.* 3.2, p. 1418 n. 1. Cf. Lewis, *op. cit.*, p. 85.
- (24) Andrewes, *op. cit.*, p. 6.